最大の貢獻であり、成果である。

そこで、今後の議論の活發化のために最後に一言。著者自身が本書でも述べるように、中國古代の農村社會は、古典古代等と比べてもはるかに國家權力との關係を強くもっている。社會のあり方が國家のあり方を決定すると同時に、國家權力のあり様が又社會を規定する面をもっている。國家論・政治史論と合せて社會史論を展開しなければ眞の中國古代史像は描ききれないであろう。そのためにも、今後とも著者との交流・相互批判・共同研究を進めて行くことを願っている。

一九八六年九月　東京　青木書店
A5版　三四三頁　六五〇〇圓

## 田仲一成著
## 中國の宗族と演劇

林　和生

本書はさきに『中國祭祀演劇研究』の大著を發表された田仲一成氏が、その後一九八一年から一九八四年にかけて、香港・シンガポール・ペナンで行われた前後十七回、延べ滯在期間十一ヵ月におよぶ精緻な現地調査の成果をまとめられたものである。前著が中國の祭祀演劇の體系を社會組織全般の立場から考察されたのに對して、本書は祭祀演劇を組成する單位として宗族の立場から宗族的色彩が現れてくる仕組みを、祭祀演劇の發生段階である市場地演劇から收斂終着段階である宗族內神演劇まで、順を追って檢討されている。本書が刊行されたあとも、續々と中國の演劇に關する優れた論文を發表されており、この分野に關しては氏の獨り舞臺といえよう。

近年、中國の村落社會の構造に對する關心がとみに高まっているが、現地調査に基づいた資料が清末から民國代にかけて行われた實態調査に限定されている現狀において、本書を含めた氏の精力的な現地調査に基づいた研究は、歷史研究の分野のみならず社會學・文化人類學・地理學等からの村落社會研究にとっても多くの重要な示唆を與えてくれる。

以下、一千一百頁を越える大册であるが、若干の乏しい私見を交えながら、各章の內容を紹介することにしたい。まず、本書の章別構成を目次に從って擧げておこう。

序
第一篇　宗族設立市場の外神祭祀
序　章　市場地祭祀演劇における宗族統制の機構
第一章　上水廖氏と石湖墟周王二院神誕祭祀
第二章　大埔頭鄧氏と大埔舊墟天后神誕祭祀
第三章　錦田泰康鄧氏と元朗舊墟建醮祭祀
第三章補論　厦村鄧氏と厦村市建醮祭祀
第四章　南頭黃氏と長洲墟建醮祭祀
結　章　廣東型から江南型への發展の方向
第二篇　複姓村落連合の外神祭祀
序　章　村落連合祭祀演劇における宗族統制の機構
第一章　坪洋陳氏等と坪崙天后祭祀
第二章　社山陳氏等と林村約建醮祭祀
第三章　碗窰馬氏等と關帝・樊仙神誕祭祀
第三章補論　複姓村落の祭祀組織―蓮花地・牛逕建醮祭祀―
結　章　廣東型から江南型への發展の方向
第三篇　單姓村落の外神祭祀
序　章　單姓村落祭祀演劇における宗族統制の機構
第一章　龍躍頭鄧氏建醮祭祀
第二章　粉嶺彭氏元宵洪朝祭祀
第三章　河上鄉侯氏洪聖神誕祭祀
結　章　廣東型から江南型への發展の方向
第四篇　宗族・同姓の內神祭祀
序　章　宗族內神祭祀演劇における宗族統制の機構
第一章　錦田鄧氏元宵祭祀
第二章　南洋興僑婚禮祭祀
第三章　南洋興僑葬禮祭祀
終　章　宗族演劇の擴大と展開
調査地點總圖
索引（一、宗族・血緣組織事項索引　二、村落・地緣組織事項索引　三、地域祀神名索引　四、儀禮祀神名索引　五、儀禮關係事項索引　六、祭祀演劇・藝能關係事項索引　Ⅰ歌謠・說唱、Ⅱ傀儡戲、Ⅲ演劇、附　檢字表）
英文目次

華南の地域社會は市場・村落が全て單姓・複姓の宗族から構成されており、そのため地緣系單位の祭祀・演劇さえも宗族を基礎に成立し、その制約を受けるという見通しがある。そのため各宗族は內神祭祀を擔うと同時に、血緣集團の外部にある地域神祭祀（外神祭祀）も支えていると考えられる。こうした地域社會の特色から、前著『中國祭祀演劇研究』の第二篇序論で、氏が祭祀演劇を祭祀の社會經濟機能に基き、

Ⅰ　地緣集團の祭祀演劇
　$Ⅰ_A$…市場的村落連合の祭祀演劇
　$Ⅰ_B$…共同體的村落連合の祭祀演劇
　$Ⅰ_C$…村落共同體の祭祀演劇
Ⅱ　血緣集團の祭祀演劇
　$Ⅱ_A$…宗族合同の祭祀演劇
　$Ⅱ_B$…家族集團の祭祀演劇
　$Ⅱ_C$…家長私宴の祭祀演劇

と分類されたのを、本書では宗族の側から祭祀演劇を、

Ⅰ′ 外神祭祀演劇
　Ⅰ′A…市場的宗族連合の外神祭祀演劇
　Ⅰ′B…共同體的宗族連合の外神祭祀演劇
　Ⅰ′C…單獨宗族村落の外神祭祀演劇
Ⅱ′ 内神祭祀演劇
　Ⅱ′A…宗族合同の内神祭祀演劇
　Ⅱ′B…家族集團の内神祭祀演劇
　Ⅱ′C…家長私宴の内神祭祀演劇

に分類しなおされた。その上で、それぞれの祭祀演劇を支えている宗族の役割を明らかにするため、香港新界の客家系宗族村落とシンガポール僑民を事例に、各宗族の祭祀集團毎に次の課題を検討された。

（一）祭祀を支える人的・財政的組織がどのような宗教的基礎の上に編成されているか。

（二）祭祀を貫く儀禮習俗の上に宗族的な組織觀念がどのような形で反映しているか。

（三）祭祀儀禮（習俗）の一部として營まれている祀神演劇の上にどのように宗族的な生活觀念が投影されているか。

まず第一篇では、中國の祭祀演劇が農村の祭祀儀禮を母胎に發生し、農村市場地（墟市）において演劇に轉化したという前著の指摘をうけて、市場地演劇組織における地主宗族の地位について検討される。これまで墟市の祭祀演劇組織において、祭祀儀禮を演劇に轉化する進歩的要因として墟市商人の役割を重視し、地主層を演劇への轉化や市場地特有の演劇様式の展開の推進を阻止する反動的存在とのみ規定してきた。しかし、墟市の祭祀演劇の發展は反動的要因として作用した地主層の側からも検討して、總合的にとらえる必要があると主張される。そのため清代になお流通經濟の中心が、定期市たる墟市の段階にあった廣東省の新安縣（現香港新界地區）で實地調査を行い事例資料を收集された。

村落が單姓・複姓の宗族で構成される華南では、墟市をめぐる地主權力は宗族權力の關係に還元できるという。ここでは墟市を設立し、店舗を築き商人を招いて地租・舗租を徴收し、墟市の交易の利を得ている特定の地主宗族またはその連合の統制力が、墟市の繁榮と關連する廟の祭祀にどの程度及んでいるかが検討される。そのため、（一）墟市の商人・住民とは無關係に獨立して掌握してゆくのか、（二）墟市の商人・その他の住民と共同して運營していくのか、（三）全く墟市の商人に運營の實權を委ねて、自らは關與しないでいくのか、という三つのパターンを想定して分析がすすめられる。

第一章では（一）の例として、特定の宗族が墟市を設立し、墟市内の廟の祭祀を主催してきた事例が検討される。墟市が宗族村落の勢力圏の交叉する交易點に成立し、商業利益を求めて各宗族が競合する故に、特定の宗族が墟市の獨占支配を維持するのは困難となる。そのため有力宗族が連合して墟市を中心とする村落連合を形成して、宗族間の協調と調整を圖っていた。しかし宗族は墟市祭祀には不熱心で、儀禮は簡略化され演劇も奉獻されず、宗族の協調を圖る宴會が祭祀の中心となる。ところが各姓の宗族がそれぞれの村落で行う祭祀の儀禮や演劇には熱心で、盛大に催しているという。

第二章と第三章では（二）の例として、墟市を設立した有力宗族が墟市内の商人と祭祀組織を形成した事例が検討される。墟市にお

ける宗族の支配は、他の宗族の挑戦を受けやすく、獨占權を維持することは困難で、擴大を續ける墟市の祭祀組織を獨力で支配できなくなる。その結果、墟市の雜姓商人と周邊村落の他姓宗族も加えて、支配宗族を中心とする諸姓連合の形で墟市の祭祀組織が再編成されるという。

この場合、不在地主である支配宗族の地位は名譽職的に後退し、建醮の祭祀儀禮も本來の目的たる孤魂の救濟よりも、現世利益を求め感謝する神恩酬謝に重きが置かれてくる。そして祭祀演劇も古風な武劇よりも近代的な戀愛悲劇が好まれ、諸神に奉納するよりも經費を集めるため觀客を樂しませる側面が強くなるという。流通經濟の發達に伴い、支配宗族は自己の村域内の建醮祭祀を支配するのが限度となり、やや離れた墟市の祭祀權を支配するだけの力を缺くようになると述べられる。

第四章では（三）の例として、墟市の支配宗族が、墟市の祭祀組織に全く關與していない事例が檢討される。支配宗族が完全な不在地主であるのと、墟市住民とエスニシティを異にしていたため、地元の祭祀組織から完全に遊離している。墟市の祭祀組織は墟市内の住民が自治的に形成し、墟市の經濟力を背景に毎年太平清醮を行っている。その際の各種の儀禮は、墟市の信徒の好奇心を刺激するよう、儀禮の單調な部分は省略して派手で演劇的な演出が目立つ。祭祀演劇も古劇を主とするものの、武劇から才子佳人劇に偏重している。こうした展開は地主宗族の保守的統制から自由な墟市祭祀の環境のなかでのみ發揮しうると論じられる。

結章では、墟市における祭祀演劇の發展を、農村を支配している有力地主宗族の墟市支配との關わりから考察される。地主宗族にとって本來の經濟行爲は、田土を佃戸に耕作させて佃租を徴收することであり、墟市を設立し商戸を招き租を徴收する行爲は、副次的なものにすぎなかったという。墟市は「虛しいもの」、對して田土は「確實なもの」という實感を彼等はもっていた。商戸も少なく防御墻壁を持たない墟市は、短期的利殖の具ではあっても、安定性・永續性に缺ける財産であった。そのため墟市に富を蓄積することは危險で、地主宗族は墟市に居住せず農村據點に執着して田土に投資し、墟市に對しては遠隔操作をするにとどまる。そして墟市商戸からの徴租權さえ確保できればよく、墟市の祭祀組織への關與などは本來望んでいなかったという。このことが農村空間の中で、墟市の祭祀演劇が保守的な地主宗族の規制からはずれて發展をとげえた大きな要因であったと著者は指摘される。

これに對して集市が市鎮に發展した江南先進地帶では、市鎮の祭祀組織は市鎮自體の内部に、城居地主宗族が核として存在し、その周邊村落を經濟的に從屬させているため、周邊村落の多數の地主宗族が構成メンバーとして組織に加わる。そのため祭祀組織は市鎮宗族を核とする周邊村落の宗族連合の形をとり、組織の規模も大きくなり市鎮宗族の組織掌握力はかえって弛緩していくという。

次に第二篇では、農村空間で市場地に次いで演劇を受入れた基盤である村落連合の祭祀演劇が檢討される。農村空間では水利共同體的な村落連合のように、より小さな規模で數箇の緊密な村落の連合が成立していることが多い。こうした村落連合は農作物に及ぶ自然災害を拂うための祭祀を蓄積し、災害の源となると信じられている幽魂・孤魂を鎮撫するための建醮祭祀を盛んに行う。そして村落連合の建醮祭祀が市場地の建醮祭祀に波及し、また市場地演劇が村落

連合の祭祀演劇に波及したという。

共同體的村落連合は經濟組織・行政組織・祭祀組織の三者の要素を併有する農村の基本的權力組織であり、內部の統制は嚴しく外部に對して閉鎖的防御的性格を持つが、その祭祀は孤立村落よりも規模が大きく開放的であったため、市場地に次いで早く演劇を受入れたという。また中國の農村の比較的大規模な祭祀演劇の過半は村落連合演劇が占め、それだけ中國祭祀演劇に重要な位置を占める。村落連合の祭祀組織は村落が構成單位となるが、華南の場合、祭祀組織は地域內の複數宗族の連合體として現れる。

本篇では村落連合祭祀組織を次の三つの類型に分け、それぞれについて地主宗族の地位が檢討される。

(一) 少數の村落から成る共同體的村落連合體が更に數箇集合した、廣域の積層複合的な村落連合の祭祀組織。

(二) 多數の村落が共同體的基盤を共有し直接に結合している、比較的廣域の村落連合の祭祀組織。

(三) 少數の村落が共同體的基盤を共有し直接に結合している、狹域の小規模村落連合の祭祀組織。

第一章では(一)の例として、六つの「約」(各約は數ヶ村からなる共同體的連合)の連合からなる祭祀組織が檢討される。對象地域では開拓宗族を核に、六つの「約」を中心に、殆ど全村落の代表的な姓氏グループを結集して祭祀組織を形成し、天后神誕に際し天后廟に祭祀を奉獻している。祭祀儀禮は正誕日に各村落の花炮會が花炮座に花炮を持込む「還炮」と、再配分する「賜炮」の行事が主で簡略化されている。祭祀演劇は四日五夜の粵劇と二夜の潮州劇からなり、うち潮州劇は村落連合組織の內部で米を主に商品の流通を掌握する新界北部の潮州人全體の奉獻にかかるという。以前は傀儡劇が奉獻されていたが近年粵劇に變化し、演目も粵劇の古典劇・名劇に加え女性觀客を意識して戀愛劇を上演するようになったという。

天后廟を中心とする村落連合體が、農業生產の面と商業流通の面とでその主體を異にし、かつエスニシティも異にするため、祭祀の二重構造、祭祀演劇の分裂が生起した。また演目の變化は、廣域の社會圈を基盤として多樣な社會層を包みこみ、墟市の祭祀組織に近い環境を有する村落連合組織の性格から生じたと述べる。村落連合組織の結合の基盤は農業共同體にあるが、組織の出來方はある程度、商業・行政を媒介とする點もあり、これが廣域積層型の多元(宗族)村落連合の特徵だと論じる。

第二章では(二)の例として、單姓又は複姓の宗祠を中心に、強固な宗族組織をもつ村落二十數ヶ村から構成され、水利共同體の實體を有する約が分析される。この組織は村落連合の形をとりながら、實質的な部分では「宗族連合」である。祭祀組織として、天后廟を中心に十年に一回建醮祭祀を擧行するが、祭祀全體に體制內的・保守的な色彩が強く、國家・宗族の安寧を前提に醮主個人の延壽と財貨の獲得など、極めて世俗的な祈願をするなど、權威と道德を誇示する姿勢が強いという。

祭祀演劇では粵劇が上演され、その演目は近代的な市場地系の演劇が主となるが、古風な演目も配し鄉村特有の保守的な忠孝節義の思想を鼓吹する演劇の傾向も殘しているという。この村落連合の祭祀組織は有力宗族の統制がよく貫徹していて、祭祀儀禮、祭祀演劇の面に保守的な特徵を示す典型的・標準的な類型を代表しているとの論じられる。

第三章では（三）の例として、小規模な山間の宗族村落連合の祭祀が検討される。この約は馬姓を中心とした複數宗族の連合體の性格を有し、毎年關帝と樊天の神誕祭祀を擧行する。村落規模が小さいのに、毎年兩神神誕祭祀を維持しているのは、馬氏を中心とする宗族が公產や宗族組織を背景に、傳統の維持に努めているためと考える。祭祀儀禮は簡素で、むしろ演劇奉獻が中心行事で、粵劇を演じ事前に配役を公示するなど古い演劇習慣を殘すものの、やはり武劇より才子佳人劇に傾いているという。山間の村落宗族連合の祭祀組織は、強いエスニシティと共同體的利害によって強固な單姓宗族支配の形を作りやすいが、祭祀演劇は市場地演劇と同樣に近代化されていくと論じる。

結章では江南における祭祀演劇が廣東型から發展したものと論じ、その特色が檢討される。廣東では祭祀圈、祭祀組織が縮小するにつれて、中核となる有力宗族の統制力が強まり、儀禮、演劇の形態に保守的性格が強くなるという。また、「約」の範圍でまとまっている村落連合組織で特に宗族の支配が強く、祭祀儀禮及び演劇が保守的な宗族統制の枠内に抑えられる傾向が強いという。廣東地方では多數の異なったエスニックグループが競合的に併居し、グループ間に械鬪・抗爭が絶えず、對立をやわらげる役割を果たすべき墟市の交易媒介の機能も十分に成熟しておらず、常に紛爭の可能性をはらんでいた。

こうした多元的鄕村社會では、單なる生產目的だけの共同體的村落連合は成立しにくい。村落連合は共同防衛のための組織として重視されるため、防衛組織の枠を越えた餘りにも多數の「約」や「村」の連合や、廣域の連合も成立しにくいという。最も適正な規模として維持しやすいのは「約」のレベルであり、そこでは中核となる有力宗族がその統制力を祭祀全般にわたり貫徹させうる條件にあり、そのため村落連合の祭祀儀禮や演劇が、墟市のそれに比べてかなりの保守性を示すという。多元的エスニックグループが雜居し、かつ交易經濟が小墟市レベルにとどまっている邊境後進地區の村落連合の特徵が、廣東の事例に集中して現れると論じられる。

對して江浙先進地區では、村落連合は經濟的契機を媒介として形成される。市鎭經濟が發達した條件では、遠く離れた村落も結びつけうるので、多くの村落單位・宗族單位からなり、かつ廣い地域を包攝する廣域多元村落連合が形成されやすいという。村落連合の祭祀や演劇の規模が、市鎭演劇に匹敵するレベルを示す點が先進地區の特徵である。また治安に不安がないので、有力地主宗族は擴大した連合體形成が可能だし、近鄕の墟市に移住し投資して市鎭に發達させうる。あるいは有力地主の據點が發達して、近鄕の墟市と合體して新しい大市鎭になるケースもあるという。ここでは農村共同體を基盤として形成された村落連合・宗族連合も、常に市場地に轉化する可能性を有している。市鎭は地主權力の據點そのものとして成長するパターンが多い。そのため市鎭の祭祀風俗は、ストレートに村落連合據點の祭祀に及んでくることになり、元來市場地から發生した祭祀演劇が、農村地區に傳播する上で極めて好都合である。歷史的に地方劇が江浙先進地區で最初に展開したのは、こうした背景に基くと述べられる。

しかし廣東では市場地で發達した演劇も、農村の村落連合の據點では、宗族地主の保守的統制を受けて展開を阻止される。また農村の村落連合據點自體が墟市や市場地に發達する可能性がほとんどな

いため、結果として墟市の華美な市場地演劇と村落連合據點の地味な農村演劇が、融合せずに對峙併存したまま推移してきたと指摘される。

第三篇では華南に多い單姓村落の祭祀演劇が檢討される。單姓村落の小規模な祭祀組織では獨自に祭祀演劇を擧行しにくく、事例や演劇の頻度も少ないが、祭祀演劇の構造からみると、最も安定した地主系演劇の據點であるという。また單姓村落レベルで、山歌、高脚、人形劇、鑼鼓、八音など「演劇」に進化する以前の農村の農耕儀禮と結びついた諸藝能が祭祀組織を基盤として維持されている。

その上、單姓村落では村落の祭祀組織が形式的には村落の組織でありながら、實質的には宗族の組織として存立するという二重構造・癒着構造が現出するという。現實には若干の他姓・雜姓を含むため、宗族が血緣組織の枠内にひきこもって、地緣組織である村落を疎外しているか、あるいは逆に血緣組織の枠をこえて外姓を含む地緣組織と融合しているかが本篇の問題となる。

さらに單姓村落が複數集落から成る複村形態か、單一集落から成る單村か、また村域が廣いか狹いかということを考慮して次の三つの類型を設定した上で祭祀組織が檢討される。（一）單姓複合散居村落の祭祀組織、（二）單姓複合集居村落の祭祀組織、（三）單姓單村の祭祀組織。そして祭祀圏の廣さは（三）→（二）→（一）の順に縮小し、宗族統制もこの順に強度が強くなり、單純化される。

第一章では（一）の例として五圍六村に分居している事例が檢討される。この地區では十年に一回村落の行事として大建醮が行われるが、直接の祭祀費用をほぼ宗族の族產からまかなうため、地主宗族一族のみで運營組織や儀禮組織が構成されている。醮に祖先が降臨すると考え、また一族の子孫繁榮を強調する「天姬送子」を特に標榜するなど、外神祭祀が內神祭祀に近い設定で行われる。儀禮は保守的で、特に桿棒振り・蓆振り・火玉投げ・火の輪回し・火鉢振りなど「打武」と呼ばれる藝能的儀禮が行われるが、これは昔村落に娛樂の少なかった時代には、道士の儀禮自體も娛樂的鑑賞の對象であったことを示すという。演技は非常に難度が高く、古代中國の傳承藝能である雜技の系統を引く可能性と、道士と俳優の系統上の同根關係を推定できるのではないかと大膽に論じている點が興味深い。演劇は女性觀客好みの才子佳人劇に重點がおかれる。

また建醮の際、正規の構成員と認められるのは、地主宗族の姓者に限られ、しかも一族全てを包攝していない。これは單姓村落でも集落が分散して複村になると、公產を掌握する中心グループとその緣邊に押しやられるグループとに分極するためだという。建醮祭祀は元來地緣組織としての村落の境域を淨めるため、土地の神たる社稷、土神が主役だが、實際は宗族の祠堂に癒着し、宗族祀祖祭祀に近い形になっている。また古い儀式藝能を演じる傳統的な環境や、舊來の祭祀觀念が殘されている點が、單姓宗族村落の保守的特色であると論じられる。

第二章では（二）の例として福建系の大姓村落が取上げられる。村では農事の預祝行事である「太平洪朝」が擧行され、その祭祀組織は族長を中心に長老組織が運營し、費用は宗族の公產から支出される。農祭（元宵や秋祭）では普通宗族內神が主役となるが、ここでは外神たる北帝が主役の位置を占める。これは宗族と社神が一體不可分の關係にあり、宗族が村落から遊離する以前の古い形態を殘しているからと考える。

祭祀は完全な外神祭祀で、本質的には農祭の性格をもち、孤魂幽鬼を超度するという側面は目立たない代りに、福を祈る「問杯」が盛大に行われ、また昔は「儺」系の雑技が豊富に織込まれ娯楽の目的も強かったという。そして最終日の長大な紅紙に宗族の人丁名を一人一行ずつ書いた榜文を園墻に貼っていく「啓榜」に、全ての儀禮の力點が集中しているという。その後一種の豊作祈願の歌である蔬歌を合唱し、また歌劇團を招いて歌曲の演唱が行われる。宗族村落の特徴として地主宗族一族だけで組織を獨占し外姓を排除するが、宗族としては一族の戸主丁男を全て組織の構成者として加入させ、年齢階層を重んじる宗族理念を強く打出している。單姓村落では、「保田禾」・「祈雨」・「保六蓄」・「逐疫」など共同體的祭祀が多く、業餘性の農村藝能がこのレベルで發達し維持されてきたことから、地方藝能史の上で單姓村落の祭祀は非常に重要だと指摘される。

第三章では（三）の近似事例として、四村連合の一分肢の側面と單姓單村の側面の両方を備えている村落が取上げられる。この村落では、毎年廣東の土神である洪聖王の神誕祭祀が行われ、その際に粤劇が奉獻されてきた。その祭祀組織は地主宗族の同族組織を基礎として構成され、豊富な族産を背景に開催される。ただ多額の演劇費を補うため、外姓からかなりの醵金を受入れているが、その醵金も日頃地主宗族の經濟的影響力の下で生活しているが故で、組織運營の面でも財政の面でも地主宗族の支配が強く貫徹していることを示しているという。祭祀行事は演劇を除くと「搶炮」が主要な儀式で、演劇の演目は、かつて武劇主體だったが觀客層の變化により文戯主體となった。が、日演に先立ち「八仙拜神」「跳加官」「天妃送子」の儀禮演目が、古式に則り連續して上演される。この事例は有力宗族による市場地祭祀組織の支配形態に近いが、日頃から地主―佃戸關係などを通して周邊の廣い範圍の雑姓・外姓との關係を培養、すなわち宗族が地縁社會を支配していることが條件となり、また演劇に古色を殘しているのも「宗族による地縁社會の支配」という構造が、ここに集中的に現れているからと論じている。

結章では、單姓村落の諸類型を通じて單姓宗族が、どのような機構でどの程度村落の祭祀組織を支配しているかが検討される。宗族の外姓に對する支配機構の點からは、（一）廣域の單姓單村→（二）狹域の單姓複村→（三）狹域の單姓單村の順に精密化するが、單姓村落において當の單姓宗族が、村落及びその祭祀組織を外姓・雑姓との對抗關係において獨占的に支配していく前提として、一、當該宗族が人口や田土を豊富に擁する有力地主宗族としての勢力をもつ、二、豊富な公産を保有という二條件が必要となる。單姓村落演劇は數が少ないが、宗族による村落祭祀演劇の支配の型としては、複姓宗族連合組織よりも純粋であり基礎的なものである。そのため宗族の血縁組織の原理が、村落の地縁組織原理との對抗關係において最も強く現れてくると論じる。また祭祀における藝能や儀禮・演劇が保守的だが、これは觀客層の意識や公演の環境がまだ舊時代のそれと對應するものを殘しているからという。

對して市鎮經濟が發達した先進地域では、近鄰の諸宗族村落と連合體を作って祭祀を行う。市鎮經濟の深化のため孤立村落の存在する餘地がなく、通常の農祭や廟祭に關して單一村落、單一宗族のみの祭祀組織はほとんど成立しえないという。それでも「龍王祭祀」など單一村落だけで行う祭祀もあり、特に保守的な單姓村落では、祭祀全てに演劇を奉じることはできないが、山歌彈唱や傀儡戯など

古い素樸な農村藝能を奉じているという。單姓村落の祭祀において、宗族支配が農村藝能の存續基盤として機能していることになるというのが著者の本篇の結論である。

最後に第四篇では宗族内神祭祀について、その組織・儀禮・演劇等の構造が分析される。中國の演劇史は宋元から明清にかけて、大地主宗族の村落支配の強化が進むに從い、地緣的な市場—村落の祭祀演劇から、血緣的な宗族内演劇に向かって收斂してきたと論じる。そして演目も宗族内の道德鼓吹に適合する「忠孝節義」劇や家庭劇を中心に類型化されてくる。それだけに宗族内演劇には、明清以來の中國演劇の宗族支配、地主支配の構造的特色が集中的に凝縮しているという。

本篇では從來儒禮のみであった宗族祭祀、特に祖先を祀る祀祖祭祀にも演劇が導入されるプロセスおよび要因が檢討されるが、明中葉以降の宗族内における擬制家族員の存在と擴大が、宗族祭祀の儒教的な「冠婚葬祭」儀禮を通俗化させ演劇の導入を可能にしたと考えている。宗族間の對立の激しい廣東では、各宗族は血緣關係が不明瞭でも、同姓集團の合同組織（すなわち擬制宗族）の形成による規模の擴大を望んだ。大宗祠の目的は各房からの神位の入祠で、「進主」が重要な行事となるが、血緣意識が稀薄な組織であるため不正入祠が起こり易かった。そのため「進主」のときに各房の代表を招き、盛大な演劇を行う手續きを課して族員に披露させたという。演劇が不正入祠防止の手段であると同時に、宗法儀禮では參集しにくい各房をひきつける手段として導入されたと論じられている。祀祖の祭祀であっても血緣意識が稀薄な各房の族衆にとって、演劇だけが各房を結合させ得る媒介物であったという。

第一章では新界隨一の大宗族の元宵節祭祀を事例に、宗祠合同演劇について檢討される。この地主宗族は洪聖廟や天后廟のような社神の祭祀には熱心でなく、周王二公祠や文武廟などの官僚神・科名神の祭祀に熱意を示す。元宵節に宗祠と社廟に同時に祭祀を獻じるが、祭祀組織はほぼ完全な宗族のみの組織で、宗族組織が地緣組織を吸收した形をとる。宗族は、前年中に生れた男子新丁を一族の成員として正式に迎え入れる重要な儀式として、元宵節を位置づけている。また洪聖廟に對面する歌臺において歌曲、歌謠が演唱されるが、宗祠にも間接に歌聲を奉獻しているという。この事例では、大宗族が宗祠を中心とする祭祀に關する限り、演劇を直接に祖先神位に奉獻することに非常に消極的であり、祭祀意識の保守性が認められる。さらにより保守的な地主宗族では元宵節で歌臺のごときものは全く行わず、終始宗祠内神主への拜禮、天后への拜禮、獻供に集中しているという。

第二章では宗族の支派・房支の範圍で「冠婚葬祭」祭祀の際に、社神や遠祖に對して奉獻される宗族家演演劇が檢討される。事例はシンガポールの僑民家族の婚禮儀禮で、鄉里の土神・社神と祖先への酬謝と賽願として、傀儡戲を奉じ獻供が行われる。婚禮での演目は傳統的な「北斗戲」・「百花橋」・「田元帥淨棚」で、その後通常の彩戲となる。この婚禮演劇の特色は、祭壇の主神が祖先神位ではなく全て外神であり、宗親神位は孤魂臺とともに脇役の位置にあることで、これは宗祠や祖先神位に、直接に演劇を獻ずるのはタブーであるためだという。宗族内祭祀に演劇が入るためには、少なくとも常に外神祭祀を媒介としなければならない、というのが後進地帶の鄉村宗族の保守的祭祀觀念であったと論じる。

第三章では葬禮祭祀の演劇が取上げられる。事例はシンガポール郊外の「瓊瑤法教九鯉洞」で十年に一回擧行される「逢甲普度」という大建醮で、目連戲文を奉獻する傳統がある。この祭祀は孤魂超度を名目とする普度の形をとりながら、實質的には孤魂よりも鄕親各家族の內神を鎭めることを目的とする。また宗族家族の葬禮忌日の儀禮の意味が強く、祭祀全體が目連の衆生超度を中心に組立てられている。そして靈位に奉獻される目連戲が甚だしく宗族主義的に變形され、元本では目連の遊歷譚に重點が置かれるのに對し、典型的な家庭劇に仕立てあげられ、終始一貫して宗族社會の平凡人の家庭劇に終始した演出となる。明代以來の宗族內葬禮演劇の本質は、宗族成員の「孝」を基本とした儀禮であり、五倫五常の保守思想や權威主義を強く打出している。

なお上演される目連戲（肉身目連）は、「齋戒沐浴」を前提とする宗教劇（宗教儀禮）のため、女性の俳優は參加を許されない。上演は幽鬼に對する超幽儀禮を隨處にはさみ、演劇というよりは儀禮の形で進行し、演劇の脚本は神佛鬼神に獻ずるものと意識される。そのため觀客の有無は問題にされず、祭祀演劇の本來の形態を示すものだという。

終章では、第四篇と本書全體の總括がなされる。明末以來の同族合同、擬制血緣集團の形成が、江南先進地帶での宗族內の祀祖演劇成立の根據になったという假說があるが、後進地帶の廣東では宗族の保守性から、宗祠內演劇の芽が育つことなく現在に至っている。また純粹に祖先靈位＝內神だけに奉ずる演劇形態はなく、全て土地神・孤魂などの外神を共同に祀る演劇形態になっている。宗族內神演劇は、常に鄕村大地主宗族の市場支配・村落支配の一手段として發達してきた中國祭祀演劇の、發展過程の最終段階の形である。要するに鄕居の地主宗族が、商業的利益を求めて移住した城居據點を中心に、分派を統合して擬制血緣團體に肥大する過程で、宗族內神演劇が形成・發展したというのが本篇の結論である。

さらに本書全體の問題點を總括する意味で、宗親會の形成と鄕村演劇への宗族演劇の影響の問題が檢討される。まず「單に同姓である」ことで結合する傾向が強まると、族譜を通ずる手續きさえ省略され、共通の經濟的利益の獲得を目的に同姓諸派が合同し、これを「同姓不宗」の「宗親會」と稱す。その成員間の血緣意識が薄くなるにつれて、內神祭祀の輪郭がぼやけて外神祭祀と區別があいまいとなり、人々を參集させるために祭祀儀禮の演劇化の程度が進み、儒禮は影が薄くなるという。當初、演劇を忌避していた宗族に演劇がはいってくる仕組みと、宗親會（擬制同族）が成立し擴大する仕組みとは、同一の筋道の延長線上にある。これは日本の近世の村落地主層が、血緣原理を捨てて地緣原理に權力基盤を求めたのとは逆に、中國の大地主宗族が、地緣社會（鄕村）の組織原理を信賴することができず、常に血緣社會の組織原理に權力の基盤を求めたことからの必然的結果であるという。これは興味ある指摘だが、日本の村落地主層が血緣原理を基盤としないという考えには疑問が殘る。

次に中國の地緣組織は血緣集團＝宗族の寄木細工的な集合體であり、地緣社會獨自の發想はなく、地緣祭祀も宗族の理想たる「天官賜福（加官晉祿）」と「天妃送子」の儀禮が導入されるなど、宗族祭祀の延長にしかすぎないと明快に論じられるが、この點はなお檢討を要する問題だと思われる。

前著で指摘されたように、「天官賜福（加官晉祿）」と「天妃送

子」が、中國祭祀演劇における慶祝劇の歸結點であり、「孤魂群の濟度」が中國祭祀演劇における悲劇の母胎となったが、その雙方がいずれも中國地方社會を構成する宗族の觀念世界から出てきている點を重視するべきと論じられる。すなわち中國祭祀演劇は發生以來、常に地主宗族の地方組織の手段として、存立し發展してきたことになるという。殘された問題として、祭祀演劇の保守的な枠組みを打破する方向に働いた、農民・工人等の「結社の演劇」の分析をあげられている。

以上で拙い紹介を終えるが、筆者の無知無能から田仲氏の大著を十分に理解しえずに、曲解してその內容を紹介したことを恐れる。地主宗族の外神および內神の祭祀組織と儀禮・演劇への對應の變化を通して、宗族が村落社會をいかに支配し、彼等の論理を貫徹してきたかを明らかにされ、中國の農村空間の社會構造（關係）の變化の過程をダイナミックに見事に描き出されている。ただ本書のように歷史的な展開を究明する課題に取組む場合、實際に擧行された祭祀の儀禮・演劇を實地に調査されて收集した資料と、文獻史料探索により集められた資料とを、いかに統合して歷史的な議論を構築していくかが難しい問題だと思う。田仲氏に續く論考は、川上忠雄『中國戲劇の歷史的研究』（高文堂出版）が出版された程度で非常に少なく、それだけ氏お一人の御活躍が目立つ。今後も中國演劇史の研究に邁進されることと思うが、中國世界のみならず儒禮がなお色濃く殘る朝鮮半島をも射程に入れられた、スケールの大きな東アジア世界の演劇史にまで御研究を發展されることが期待される。

一九八五年三月　東京　東京大學東洋文化研究所
A5版　一一一四頁　二六〇〇〇圓